斎藤徳元　一回

伊藤浩睦

今回は江戸時代の初めのころの俳人の斎藤徳元を取り上げてみます。斎藤徳元は今では知られていない俳人になっていますが、江戸時代の初期俳諧で占めていた立場は軽くなく、血筋や、俳人になる前の経歴も面白く、もっと注目されて良い人です。

美濃の斎藤系譜には、徳元の父親の斎藤元忠の母親は、美濃国主斎藤義龍の妹と記されています。

斎藤義龍は系図上では斎藤道三の長男となっていますが、実は美濃守護の土岐頼芸の胤ではないかという説のある人で、その妹は間違いなく一代の梟雄斎藤道三の子です。つまり徳元は女系ながらも斎藤道三の曾孫になります。

父親の斎藤元忠の父親は斎藤利之で、美濃守護代の斎藤家の血筋に繋がる人です。斎藤氏の本家は長井規秀といっていた斎藤道三に乗っ取られますが、分家は幾つか残っていて、明智光秀の家老であった斎藤利三もその系譜に連なっています。

斎藤利之は、残っていた守護代の斎藤一族の中の有力者であったので、斎藤道三が娘を嫁がせたものと考えられています。徳元は、祖父は美濃守護代家の分家の出で、祖母は美濃を乗っ取った斎藤道三の娘という血筋になります。

徳元は、歴史には、美濃墨俣の領主で二千石の侍として登場します。織田信長の嫡孫で岐阜城主だった織田秀信に仕えていました。織田秀信は、清須会議で三法師として名が出て来る人です。

地方大名の家来であれば二千石の身代ではたいした扱いにならないのですが、豊臣政権は織田政権を継承していますから、尾張や美濃の出身者は優遇されていました。徳元の領地の墨俣は、豊臣秀吉の若いころに一夜城で縁があった土地なので、秀吉に可愛がられて、豊臣姓を下賜されていたと伝わっています。徳元

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

は二千石の陪臣ながらも、従五位下斎宮頭に任官していて、大坂城内では大名並みの待遇を受け、斎藤斎頭と呼ばれていました。

このころに連歌を里村昌琢に学びました。連歌師になろうというものではなく、高級武家のお遊びとしての連歌です。高級武家の間では、茶道に押されて室町期のような人気はなくなったとはいえ、愛好者も多く、連歌の席に出られないようでは恥ずかしいという意識も残っていました。徳元には文芸の才能があったようで、連歌で名が知られます。

関ヶ原の戦いでは織田秀信は石田方に付いたので、岐阜城は徳川方によって落とされ、秀信は高野山に追放され、仕えていた者たちは主家を失い浪人となります。岐阜城の戦いで戦死しなかった徳元も墨俣の領地を失い浪人になります。

豊臣家の奥祐筆だった松永貞徳もこのときに、天下を失った豊臣家から解雇されて浪人になります。松永貞徳は京都に住んで連歌師を開業し、滑稽が得意だったことから俳諧師に転じて、江戸俳諧の式目を定めるなどして、貞門派と呼ばれる初期俳諧の指導者になりますが、斎藤徳元は十二年間の消息不明の期間を経て、若狭の京極忠高に二百石で仕えます。役目は文事応接役で京都に駐在して公家との交際にあたりました。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。